第３章　外来業務

１　総括

保健発達センター（通称）の外来診療は、保健部門および発達部門にそれぞれ分かれて行われている。保健部門は、医療機関のほかに乳幼児健診や学校健診等で指摘された、心身に何らかの問題をもつ子どもたちの診療が行われている。また，埼玉県予防接種センターとしての機能も担っている。発達部門は、乳幼児期に発達に何らかの問題をもつとされた子どもたちの診断、フォローおよび指導が行われている。

なお、保健発達センター開設以来継続されていたスクリーニング外来は26年度をもって閉鎖し、発達外来に統合された。

（田中　学）

保健発達部門診療科別外来延べ患者数(平成27年度)

区分	診療月	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
	診療実日数	21		18		22		22		21		19	
	区分	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数
保健部門	精神保健	18	610	10	560	9	565	15	655	18	628	7	532
	予防接種	19	85	9	58	23	88	19	86	20	97	12	75
	生活アレルギー	7	35	7	44	4	34	3	36	2	26	4	28
	成長発達	2	17	3	9	3	14	4	31	2	36	5	20
	夜尿・遺尿	3	101	5	129	6	118	10	138	8	118	1	123
	遺伝相談	1	5	2	3	0	6	0	6	0	8	1	3
	国際保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	心臓検診	3	43	2	39	25	68	45	112	16	90	0	55
	腎臓検診	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	生活習慣病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	思春期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延べ患者数計	53	896	38	842	70	893	96	1,064	66	1,003	30	836
	1日平均患者数	2.5	42.7	2.1	46.8	3.2	40.6	4.4	48.4	3.1	47.8	1.6	44.0
発達部門	発達外来	35	360	27	312	36	398	34	398	25	388	21	329
	装具外来	0	51	0	43	0	72	0	62	0	61	0	65
	スクリーニング外来	0	4	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0
	アセスメント外来	0	16	0	12	0	13	0	13	0	13	0	13
	多職種外来	0	189	0	174	0	225	0	201	0	209	0	179
	延べ患者数計	35	620	27	543	36	708	34	674	25	673	21	586
	1日平均患者数	1.7	29.5	1.5	30.2	1.6	32.2	1.5	30.6	1.2	32.0	1.1	30.8
合計	延べ患者数計	88	1,516	65	1,385	106	1,601	130	1,738	91	1,676	51	1,422
	1日平均患者数	4.2	72.2	3.6	76.9	4.8	72.8	5.9	79.0	4.3	79.8	2.7	74.8

区分	診療月	10月		11月		12月		1月		2月		3月		計	
	診療実日数	21		19		19		19		20		22		243	
	区分	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数	新来	延数
保健部門	精神保健	13	641	12	600	8	620	13	666	6	547	13	722	142	7,346
	予防接種	14	145	15	196	13	170	19	128	24	140	13	149	200	1,417
	生活アレルギー	0	23	0	24	3	26	2	36	3	35	6	38	41	385
	成長発育	5	17	4	14	3	10	5	16	1	14	6	24	43	222
	夜尿・遺尿	5	128	2	92	5	124	1	114	5	110	3	112	54	1,407
	遺伝相談	7	12	0	6	0	7	0	5	1	8	1	4	13	73
	国際保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	心臓検診	4	43	1	47	3	48	1	38	0	32	2	71	102	686
	腎臓検診	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	生活習慣病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	思春期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	延べ患者数計	48	1,009	34	979	35	1,005	41	1,003	40	886	44	1,120	595	11,536
	1日平均患者数	2.3	48.0	1.8	51.5	1.8	52.9	2.2	52.8	2.0	44.3	2.0	50.9	2.4	47.5
発達部門	発達外来	19	387	18	337	21	363	36	339	26	331	24	374	322	4,316
	装具外来	0	57	0	41	0	62	0	53	0	53	0	79	0	699
	スクリーニング外来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	アセスメント外来	0	11	0	14	0	7	0	6	0	14	0	11	0	143
	多職種外来	0	206	0	181	0	195	0	208	0	160	0	212	0	2,339
	延べ患者数計	19	661	18	573	21	627	36	606	26	558	24	676	322	7,505
	1日平均患者数	0.9	31.5	0.9	30.2	1.1	33.0	1.9	31.9	1.3	27.9	1.1	30.7	1.3	30.9
合計	延べ患者数計	67	1,670	52	1,552	56	1,632	77	1,609	66	1,444	68	1,796	917	19,041
	1日平均患者数	3.2	79.5	2.7	81.7	2.9	85.9	4.1	84.7	3.3	72.2	3.1	81.6	3.8	78.4

2　保健外来

1）予防接種・国際保健外来（埼玉県予防接種センター）

地域で予防接種を受けられない方に対して、埼玉県予防接種センターとして予防接種を行っている。定期接種では市町村長の依頼書と主治医の紹介状と２通持参する。任意接種では保健医療機関からの紹介状で受診している。平成27年４月１日現在、64市町村（県内40市20町１村、茨城県１市２町）と当センターが予防接種契約を結んでいる。契約を結んでいないのは、県内では２町のみである。

2015年度の予防接種外来は、新患数200名（前年比６名増）、再診数1217名（前年比161名減）である。紹介元は市町村保健センターが多い。予防接種件数は4278件（前年比691件減）である。

（川野　豊）

表１　2015年度予防接種等の件数

	３歳未満	３歳～６歳未満	６歳以上	合計	前年比
２種混合	0	1	55	56	−14
３種混合	0	0	0	0	−9
４種混合	138	7	12	157	−11
A型肝炎	31	34	197	262	−61
ＢＣＧ	30	0	0	30	−9
B型肝炎	75	30	207	312	−110
インフルエンザ	89	76	206	371	−56
狂犬病	31	32	187	250	−38
水痘	71	18	23	112	−13
ツベルクリン	0	1	0	1	−1
日本脳炎	54	106	202	362	−26
肺炎球菌	0	0	15	15	+3
肺炎球菌(結合型)	251	5	9	265	−62
破傷風	1	1	89	91	−5
風疹	0	0	1	1	+1
ポリオ(経口生)	0	0	0	0	0
ポリオ(不活化)	0	4	35	39	−37
麻疹	0	1	2	3	+2
麻疹・風疹混合	88	24	48	160	−18
ムンプス	36	21	46	103	+6
ロタウイルス				27	−3
ヒブワクチン	239	4	0	243	−61
ヒトパピローマ				0	0
シナジス筋注用				1,413	−180
髄膜炎菌	1	1	3	5	+5
総合計件数				4,278	−691

2）心臓検診外来

心臓検診外来は、学校心臓検診の二次検診と三次検診（主に三次検診）、その後の経過観察、心房中隔欠損・動脈管開存カテーテル治療前後の外来、などを中心に行っている。通常は毎週木曜日の午後で、学校心臓検診の時期・夏休みは火曜日の午後も行っている。新患は学校心臓検診が中心で、健康づくり事業団・さいたま市の一部（大宮、与野、岩槻地区の一部）・他の検診業者、の二次・三次検診で受診する学童が多い。新患数は、平成27年度が118名で、例年とほぼ同様であった。小学生と中学生が全体の90%を占めていた。

疾患別では、不整脈が全体の53%（63名）で約半数を占めていた。内訳は心室性期外収縮（28名）、上室生期外収縮（３名）、WPW症候群（10名）、QT延長症候群（10名）、などであった。先天性心疾患では、心房中隔欠損が多く（５名）、僧帽弁逸脱・閉鎖不全（４名）などが診断されている。心房中隔欠損は、Amplatzer閉鎖栓でのカテーテル治療開始以後は診断率が向上し、今年度も５名が診断されている。

検査部門では、例年通りトレッドミル運動負荷試験を中心とした生理検査が多く、QT延長症候群の遺伝子検査（他院への依頼）、WPW症候群に対するATP &アミサリン負荷試験、秋から春先にかけての重症心疾患児に対するシナジス筋注（RSウイルスの予防で月１回を筋注行う）も並列して行っている。

平成29年１月からは、新病院に移転し、循環器外来のブースで行っていく予定である。

表１　心臓検診外来新患の疾患別内訳（平成27年度）

１）不整脈

心室性期外収縮	28
上室性期外収縮	3
WPW症候群	10
完全右脚ブロック	3
QT延長症候群	10
Ⅰ.Ⅱ° 房室ブロック	1
上室・心室頻拍	7
その他	1
計	63

２）心疾患

心房中隔欠損	5
心室中隔欠損	0
肺動脈弁狭窄	2
僧帽弁逸脱・閉鎖不全	4
動脈管開存	1
その他	4
計	16

３）その他

川崎病既往	1
心筋症	0
マルファン	0
異常無し	38
計	39

表２　心臓検診外来新患の動向

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
就学前	2	0	3	0	3
小学生	73	38	47	72	43
中学生	70	61	69	47	63
高校生以上	16	12	16	11	9
計	161	111	135	130	118

3）生活アレルギー

平成27年度の生活アレルギー外来の新患数は41名（前年比16名減）、再来数は344名（前年比49名減）である。主たる病名では食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、アレルギー性鼻炎、薬物過敏症などである。学校給食が昨今話題になっており、学校からの要望による学校給食管理指導表を記載することが多くなった。紹介元は医療機関、院内他科、保健機関である。食物負荷試験、皮膚テスト（プリックテスト）・血液検査・問診・経過表・食物日誌などにより原因アレルゲンの検索を行った。さらに食物負荷試験により食物除去の解除または制限続行必要性の判定を行った。保健指導はアレルゲン対策,環境の整備、スキンケア（保湿剤）、対症療法（ステロイドおよび非ステロイド軟膏）、薬物療法（抗アレルギー薬・抗ヒスタミン薬）、食物除去等を行った。

（川野　豊）

4）夜尿外来

平成27年度は、金曜日の午前、午後を腎臓科の２名が担当した。患者数は1407名（新患54名）であった。本外来の特徴としては、ADHDなど依存症を持つ患児が多く、精神科などと連携して治療を行っている。当科の方針としては、まず生活指導（便秘改善、時間排尿、便秘解消）を行い改善がない症例に対して、薬物療法（デスモプレシン口腔内崩壊錠、抗コリン薬、漢方薬など）やコードレスタイプの夜尿アラームを導入している。その成果は、日本夜尿症学会やICCS（国際小児尿失禁学会）で報告した。

藤永 周一郎（科長兼副部長、夜尿症学会常任理事、小児科学会専門医、日本腎臓学会専門医・指導医）
櫻井 俊輔（医長、小児科学会専門医）

（藤永周一郎）

5）成長発育外来

平成27年度の初診患者数は53名で、表に示すように低身長を主訴として受診した患者が最も多く全体の74%を占め、次いで発育障害（体重増加不良、やせなど）が23%であった。

紹介元は、医療機関からの紹介が68%と最も多く、次いで市町村保健センターからの紹介が21%であった。

精査の結果、成長ホルモン分泌不全性低身長症１例を診断した。

（会津克哉）

平成27年度成長発育外来初診患者数

低身長	39
発育障害(体重増加不良など)	12
肥満	2

6）遺伝相談外来

遺伝相談事業と遺伝相談外来

１）遺伝相談外来：受診者54名の概要を表１に示す。２）遺伝性・先天性疾患の集団外来：本年度の集団外来の開催状況を表２に示す。３）遺伝相談事業講演会『障がいのある子どもと家族の支援：特に母親に対して』水戸川真由美氏（日本ダウン症協会理事）を開催した。４）ダウン症候群埼玉県内地域家族会の代表者による第10回家族会連絡会を開催した。

（大橋　博文）

表１　2015 遺伝相談

1.　単一遺伝子疾患	
難聴(コネキシン26異常)	11
難聴(非症候性)	1
慢性肉芽腫症	1
ベッカー型筋ジストロフィー	2
家族性大腸ポリポーシス	1
脆弱X症候群	1
X連鎖性水頭症	3
C9欠損症	1
ムエンケ症候群	1
デニス・ドラッシュ症候群	1
骨発生不全症3型	1
副腎白質ジストロフィー	1
血友病A	2
2.　染色体異常	
1qトリソミーモザイク	1
3qトリソミー・6qモノソミー	1
6qモノソミー・10pトリソミー	1
8pトリソミー	1
11p13.1-p14.1欠失	1
13qモノソミー	1
15q11.2-q13.3欠失(アンジェルマン症候群)	1
16q12.1-q21欠失	1
21トリソミー(トリソミー型)	10
21トリソミー，der(13;21)(q10;q10),+21	1
MECP2(Xq28)重複症候群	2
der(14;22)(q10;p10)　ロバートソン転座	1
3.　多因子遺伝病・その他	
ベックウィズ・ビーデマン症候群	1
精神発達遅滞	2
多発奇形・発達遅滞	2
計	41

表２　2015 年度開催　先天異常症候群集団外来開催状況

日付	疾患名	情報提供担当者	家族数	参加人数	他県よりの家族数	他県よりの総人数	他県よりの総人数
2019/5/13	難聴＋ダウン症候群	遺伝科医	6	17	0	0	10
2019/5/23	コフィンローリー症候群	遺伝科医	2	6	1	3	0
2019/6/13	就学について(第2回)	臨床心理士	30	60	8	20	5
2019/7/4	ＣＦＣ症候群	遺伝科医	3	8	0	0	0
2019/8/1	ベックウィズ症候群	遺伝科医、矯正歯科、整形外科医	26	78	17	52	0
2019/8/5	アペール症候群	遺伝科医	3	6	0	0	0
2019/9/9	脊椎骨端異形成症とスティックラー	遺伝科医	7	22	2	8	6
2019/9/30	ソトス症候群	テーマ別交流会	9	20	2	7	3
2019/10/7	ウィリアムズ症候群未就学	遺伝科医	6	19	0	0	0
2019/10/14	22ｑ11.2欠失症候群	精神科医	14	15	2	2	0
2019/11/18	カブキ症候群	言語聴覚士	14	30	9	19	25
2019/12/9	ピットホプキンズ症候群	遺伝科医	5	15	4	12	6
2019/12/16	22ｑ11.2欠失症候群未就学	遺伝科医	13	27	1	2	3
2020/1/13	ウィリアムズ症候群	MSW	15	29	6	8	4
2020/1/20	プラダーウィリー症候群	代謝内分泌科医	13	25	2	4	17
	2015年度開催回数　15回		合計	352	52	133	62
			平均	25.1	3.7	9.5	4.4

7）精神保健外来

精神保健外来は、保健発達部の外来として、医療機関、保健機関、教育機関、福祉機関などから紹介された子どもと家族を診察している。平成27年度の新患数は128人であり、主たる主訴（表1）、主たる診断名（ICD-10による：表2）、年齢（表3）、紹介元（表4）は以下の通りである。平成18年4月より県立精神医療センター児童思春期病棟が開棟したことにより、その役割分担を行ったことから、より低年齢の受診が目立っている。院内他科を経由する身体症状を伴った患者の診察を中心に今後も活動を展開していく方針としたため、院外初診は減少している傾向にある。他機関とも連携を取りながら、より効率的な受診状況を整えることが今後の課題である。

（舟橋敬一　平山優美）

表1　2015年度精神科外来主訴別新規患者数

主訴	新規患者数(人)
1．発達・言語の遅れ	25
2．行動の問題	39
3．不登校	9
4．身体症状	17
5．遺糞・遺尿(排泄の問題)	2
9．チック	7
11．抜毛	2
12．非行	3
13．過度の不安	3
16．睡眠の問題	3
18．その他	1
計	111

表2　2015年度精神科外来疾患別新規患者数

ICD-10　診断カテゴリー	新規患者数(人)
F3　気分(感情)障害	
F32　うつ病エピソード	0
F4　神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	
F41　他の不安障害	0
F42　強迫性障害	2
F43　重度ストレス反応　[重度ストレスへの反応]および適応障害	7
F44　解離性(転換性)障害	2
F45　身体表現性障害	10
F5　生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	
F50　摂食障害	0
F6　精神のパーソナリティーおよび行動の障害	
F63　習慣および衝動の障害	1
F7　精神遅滞　[知的障害]	
F70　軽度精神遅滞	17
F71　中度[中等度]精神遅滞[知的障害]	0
F8　心理的発達の障害	
F81　学力の特異的発達障害	2
F84　広汎性発達障害	53
F9小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	
F90　多動性障害	8
F95　チック障害	7
F98　小児期および青年期に通常発症する他の行動および情緒の障害	2
計	111

表３　2015 年度精神科外来年齢区分別新規外来患者数

初診時年齢区分	新規患者数（人）
幼児期前半	2
幼児期後半	30
小学前半	37
小学後半	16
中学生	24
高校生	2
計	111

表４　2015 年度精神科外来依頼科別新規患者数

診療科	新規患者数（人）
総合診療科	7
未熟児・新生児科	1
代謝内分泌科	5
腎臓科	0
感染免疫・アレルギー科	2
循環器科	3
遺伝科	6
神経科	29
小児外科	5
脳神経外科	5
形成外科	2
泌尿器科	1
耳鼻咽喉科	5
眼科	1
夜尿・遺尿外来	3
アセスメント外来	0
発達外来	31
その他	5
計	111

3　発達外来

1）スクリーニング外来（担当：松本、木野田、南谷）

スクリーニング外来は、歩行可能な発達レベル（通常は１歳６か月以上）で発達に何らかの問題を有する小児を内科的に診察し、器質的疾患の有無について諸検査を行う。さらに、多職種による総合評価を要する症例に関してアセスメント外来を紹介している。

平成 26 年度の初診患者数は 50 名であり、前年度より 41 名減少した。非常勤の担当医の電子カルテへの適応を考慮し、初診患者数を制限したことが大きかった。保健センター・保健所からの紹介が約 2/3 を占める状況には変わりない。初診患者の年齢は３－４歳が８割弱を占め、三歳児健診後の精密検査目的の受診であった。その紹介（受診）の理由はことばの問題（含む発音不明瞭）が計 38 名（76%）、行動の問題（含む多動）が計 29 名（58%）、集団や会話の問題が計８名（16%）であった。集団生活を初めて経験した幼児に関する保護者の心配が主たる受診理由になっていた。

（南谷　幹之）

紹介元	人数
保健センター・保健所	32
医療機関	17
福祉機関	0
療育機関	1
教育機関	1
合計	51（重複）

初診時年齢	人数
2歳	7
3歳	30
4歳	9
5歳	4
合計	50

紹介（受診）理由	人数
言葉の遅れ	36
行動の問題（癇癪・こだわり等）	18
多動	11
集団行動がとれない	4
会話ができない	4
発音不明瞭	2
偏食	2
その他	8
合計	85（重複）

2）アセスメント外来（担当：平山、田中、舟橋、南谷）

アセスメント外来は、スクリーニング外来および発達外来から紹介された、発達に何らかの問題が疑われる幼児を複数の職種により総合的な評価を行う集団外来です。実際には医師（小児神経科医あるいは児童精神科医）、看護師、作業療法士、言語聴覚士および臨床心理士の５名が午前中３～４時間で最大４組の子どもと保護者と順に面談し、診察・検査や集団での行動・遊びの観察を通して評価を行います。また、数人の保育士を配置して遊びや対人関係の場を形成しています。引き続いて行う合同カンファレンスにおいて、受診児の問題点を整理し、午後に医師が保護者に評価結果をお伝えし、今後の対応への考え方や手段を示しています。

平成26年度の受診児総数は142人（女29、男113）で，前年度より12人減少しました（外来当日の体調不良が主な理由）、年齢は３歳９か月から７歳１か月まででで，大部分は３歳台から５歳台でした。診断の内訳は自閉症スペクトラム障害（DSM-IVにおける自閉性障害および非定型広汎性発達障害）の診断が合計124人であり、患者総数の87％を占めました。事後措置は院外・地域での集団生活における支援が主体となっています。通園・訓練施設・児童デイサービスにおける個別的な発達支援を必要に応じて受けることのできる環境が理想的ですが、地域差もあり実際は保育所・幼稚園に依存する例が多くなっています。院内支援に関しては、子どもの具体的なニーズに応じた支援を安定して受けることのできる体制の構築が望まれます。

（田中　学）

診断名	人数
自閉症スペクトラム障害(ASD)	31
知的障害＋ASD	84
知的障害(疑い含む)	12
境界知能	2
境界知能＋ASD	9
注意欠如・多動性障害	4
合計	142

事後措置(重複有り)措置数	
院外・地域支援	
通園・訓練施設・児童デイ	45
保健センター・親子教室	48
保育所・幼稚園(加配等)	49
院内支援	
ことば・コミュニケーション外来	
・非高機能グループ	18
・高機能グループ	5
作業療法	19
言語聴覚療法	3
心理相談・検査	18(重複1)

3）発達外来（担当：南谷、菊池、小一原、田中）

発達外来は、初診では就学前までの発達面における何らかの問題を指摘されたお子さんを対象としています。県内外の各地域で行われている乳幼児検診や発達相談からの紹介、医療機関からの紹介のほか、当センター内ではNICUを退院したハイリスク児や院内他科でフォローされているお子さんの依頼をお受けしています。小児神経専門医が担当し、症状や問題点の評価を行い経過観察するとともに、必要に応じて当センター内での訓練あるいは院外の指導・療育機関を紹介しています。

平成26年度の初診児数は627（院内紹介195，院外紹介432）であり、前年度比 で113（22%）増でした。増加の大部分が院外医療機関からの紹介患児でしたが、スクリーニング外来初診患児の減少分とほぼ一致します。表に記しました診断名は、初診時の暫定的なものです。発達外来はことばの遅れを紹介理由として受診される児が多いのですが、自閉症スペクトラム障害（ASD）の何らかの特性をもつ児がその半数以上を占めました。なお、この表におけるASDには，様々な発達指数の児たちが含まれています。初診時の年齢は３歳台が最も多く、３歳児健診からの紹介が多くを占めています．それ以下の年齢については大きなばらつきがなく、とくに２歳台での紹介が増加しました。

（田中　学）

紹介元	人数
院内各科全体	195
未熟児新生児科	72
耳鼻咽喉科	43
遺伝科	22
総合診療科	22
整形外科	9
神経科	5
その他	22
院外	432
医療機関	241
保健センター・発達相談	178
療育施設	10
児童相談所	3
合計	**627**

初診時の暫定的診断名	人数
自閉症スペクトラム障害	251
知的障害	167
発達遅滞	33
ハイリスク児	49
筋緊張低下	30
染色体異常・奇形症候群	9
正常バリエーション	24
言語発達遅滞	22
構音障害・吃音	9
脳性麻痺	14
注意欠如・多動性障害	6
哺乳・摂食障害	3
選択性緘黙	2
重症心身障害児	3
その他	5
合計	**627**

初診時年齢	人数
0歳	96
1歳	108
2歳	116
3歳	156
4歳	68
5歳	63
6歳以上	20
合計	**627**

4）装具診

装具診は、毎週火曜日の午後3:00～4:00に行われている。整形外科医師、リハビリテーション科医師、理学療法師、義肢装具師が連携して患児を個別に十分検討して、装具などの処方、作成までを一貫して行っている。また火曜日には、seating clinicを開設し、複数の専門業者と協力して車椅子、座位保持装置などの作成を行っている。

整形外科医、リハビリ医、PTとが時間を割いて個別の症例について検討する機会となっており、装具療法の限界の患児についての手術適応についても話し合いを行っている。

また、当院脳神経外科がおこなっている脳性麻痺患児への選択的後根神経切断術との適応について、定期的にカンファレンスをおこなっている。

（平良　勝章）

4　多職種プログラム外来

多職種外来の内容は表に示すとおり施行した。

名　称	対　象	スタッフ	回　数	目　　的
ＤＫ外来	０歳・１歳のDown症児	遺伝科医師 ＰＴ・ＯＴ 心理士・栄養士 看護師・ケースワーカー・ 歯科衛生士	月１回	発育支援 両親の心理的援助 環境の整備
ＳＨ外来	重症心身障害児	神経科医師 ＰＴ 看護師	年１回	水中運動療法の導入 適応症例に対して、複数回の実施
ＰＷ外来	プラダーウィリ症候群の乳幼児	医師 ＰＴ・ＯＴ・栄養士 看護師・心理士 ケースワーカー	年１回	健康管理、栄養管理、発達支援、家族支援
すくすく外来	超低出生体重児	医師・歯科医師 看護師・歯科衛生士 ＰＴ・ＯＴ・ＳＴ 心理士・栄養士	年３回	・超低出生児の特性や成長・発達に合わせた接し方などの理解を促進し、育児支援を行う ・スクリーニング
もぐもぐ外来(哺乳摂食評価外来)	哺乳・摂食障害のみられる児	医師・歯科医師 看護師 ＰＴ・ＳＴ・ＯＴ・ 心理士・栄養士	月１回	哺乳摂食場面を観察・評価し治療方針を決定する
難聴ベビー外来	０歳の難聴児	耳鼻咽喉科医師 ＳＴ 看護師 ケースワーカー 音楽療法士(ボランティア)	月１回	新生児聴覚スクリーニングで難聴と診断された児の耳鼻科的ケア・補聴器適合・両親への援助・音楽療法
ことば・コミュニケーション外来	自閉症スペクトラム児(広汎性発達障害児)	神経科・精神科医師 ＳＴ	週１回 全３回 コース	自閉症スペクトラムのある児の両親へ、障害の特徴の理解を促し、特性に合わせた支援の方法を指導する
かぶと虫外来	二分脊椎児	医師・看護師 ＰＴ・ＯＴ・栄養士 歯科衛生士 ケースワーカー	年１回	二分脊椎児の両親に対し、障害の特徴の理解を促し、育児支援を行う
気管切開外来	気管切開をしている児	耳鼻科医師・ＳＴ 相談室看護師	月1回	気管切開をしている児の育児支援、コミュニケーションの支援、両親への援助を行う

１）　ＤＫ外来（ダウン症候群総合支援外来）

ダウン症候群のお子さんとご家族を対象として、育児に役立つ情報を提供するとともに、両親への心のケアを　目的とした多職種の専門家による月１回、１年間のプログラムを開催するグループ外来である。平成元年にスタートし、延べ1,500人の修了生を送り出している。

２）ＰＷ外来

プラダーウィリー症候群の継続的総合支援をめざす外来である。本年度は『成長ホルモン治療と性腺補充療法について』（代謝内分泌科　望月先生）のテーマで外来を開催した。

5　コメディカル業務

1）理学療法

平成27年度の初診患者数は296名で26年度より53名増加し、その疾患別内訳を見ると、中枢神経疾患（＋39）・呼吸器疾患（＋18）・悪性新生物（＋10）が増えている。【表１】

総受診者数は268件増加し、取得単位数は1060単位増加した。特に入院患者数の増加（＋219件）が目立つ。これは、小児がんのリハビリテーションを充実させたことと、NICUやICUで急性期の呼吸リハビリテーションに力を入れたことによる。【表２】

脳性麻痺児を対象とした痙縮治療（筋腱延長術・ボトックス治療・脊髄後根切断術）とその前後の理学療法プログラムがほぼ確立し、治療効果の集積と検討を継続している。また、県内３か所の特別支援学校（宮代・蓮田・川島ひばりが丘）から、非常勤講師として招かれ、教師の指導と情報共有に取り組んだ。

（PT　吉岡　明美）

表１　初診患者疾患分類別内訳

疾患分類	件数
中枢神経系疾患	121
呼吸器疾患	42
骨関節疾患	42
悪性新生物	29
運動発達遅滞	29
染色体異常	22
神経筋疾患	7
その他	4
合計	296

表２　月別診療件数内訳

月	診療日数	件数			診療報酬	初診患者数		
		外来	入院	合計	（単位数）	外来	入院	合計
4	21	481	262	743	1320	8	17	25
5	18	426	267	693	1223	6	12	18
6	22	493	383	876	1510	9	16	25
7	22	456	336	792	1478	2	11	13
8	21	497	366	863	1804	5	17	22
9	19	375	294	669	1243	7	8	15
10	21	408	410	818	1512	5	17	22
11	19	336	382	718	1279	15	19	34
12	19	352	499	851	1443	8	24	32
1	19	375	409	784	1304	5	22	27
2	20	340	445	785	1340	5	21	26
3	22	394	479	873	1361	9	28	37
合計	243	4,933	4,532	9,465	16,917	84	212	296

2）作業療法

平成27年度は常勤４名、非常勤３名（週２日１名、週１日１名、月１日１名）の体制で業務に従事した。一日平均受診患者は16.4人（昨年度は14.7人）年間の延べ受診者数は平成26年度より423名増加し3,564人となった。

平成27年度の初診患者は外来154名、入院31名、合計185名であり、平成26年度との比較では32名の増であった。初診患者について障害種別の内訳は知的・精神機能の障害（自閉性スペクトラム障害や精神発達遅滞、その他基礎疾患に伴う発達の歪みや遅れ）が154名、姿勢・運動の障害（脳性麻痺、脳腫瘍等による中枢性運動障害等）が21名、整形外科疾患が６名、本年度より開始されたがんリハビリテーション対象疾患が４名であった。

県内の特別支援学校からの要請により非常勤講師や講演・講義を行い教育機関との連携を積極的に図った。

（OT　岡田　洋一）

表１　月別患者数内訳（平成 27 年度）

月	診療日数	患者数			一日平均患者数			初診患者数			アセスメント外来	実施単位数
		外来述べ人数	入院延べ人数	合計	外来	入院	合計	外来	入院	合計		
4	21	246	25	271	11.7	1.2	12.9	17	1	18	15	600
5	18	251	19	270	13.9	1.1	15.0	15	1	16	12	584
6	22	283	34	317	12.9	1.5	14.4	14	3	17	13	689
7	22	292	39	331	13.3	1.8	15.0	14	1	15	11	722
8	21	303	36	339	14.4	1.7	16.1	12	2	14	13	737
9	19	288	27	315	15.2	1.4	16.6	13	2	15	12	710
10	21	341	48	389	16.2	2.3	18.5	13	3	16	11	842
11	19	289	37	326	15.2	1.9	17.2	9	1	10	12	688
12	19	279	40	319	14.7	2.1	16.8	10	2	12	6	665
1	19	316	23	339	16.6	1.2	17.8	13	2	15	6	744
2	20	322	54	376	16.1	2.7	18.8	12	9	21	14	841
3	22	330	65	395	15.0	3.0	18.0	12	4	16	11	842
合計	243	3,540	447	3,987	14.6	1.8	16.4	154	31	185	136	8,664

＊実施単位数についてはアセスメント外来、もぐもぐ外来等の実施単位数は除く

表２　初診患者　障害種別内訳

障害種別	件数	比率
知的・精神機能の障害	154	83.2%
姿勢・運動発達の障害	21	11.4%
整形外科疾患	6	3.2%
廃用症候群等のがんリハ疾患	4	2.2%
合　計	185	100.0%

表３　初診患者　処方依頼科別内訳

処方依頼科	件数	比率
発達外来	88	47.6%
神経科	26	14.1%
精神保健	39	21.1%
整形外科	13	7.0%
脳神経外科	10	5.4%
遺伝科	5	2.7%
血液腫瘍科	4	2.2%
合　計	185	100.0%

3）視能訓練

平成27年度の視能訓練業務内容は表１の通りである（表１）。今年度は視能訓練士２名で眼科検査、訓練を行った。眼科の診療体制が常勤医師1名から、年度の後半に非常勤医師が１名増員され２名体制になったため、検査人数・検査件数ともに昨年より増加している。

弱視訓練の新患数疾患別内訳は表2の通りである（表２）。例年通り遠視性不同視弱視、斜視弱視が訓練の大半を占めた。

ロービジョン訓練は11名に対し視覚的補助具の選定と訓練を行った。

（ORT　佐々木　優子、小林　順子）

表１　平成 27 年度月別件数

月	診療日数	検査人数	検査件数	訓練件数	弱視鏡訓練件数	病棟検査件数	アセスメント外来
4月	18	389	705	19	0	19	1
5月	18	358	648	12	2	21	0
6月	19	443	764	13	0	31	1
7月	21	433	818	20	2	24	2
8月	21	524	1051	28	4	20	4
9月	18	340	719	21	0	25	1
10月	21	397	752	15	1	24	1
11月	18	392	708	17	0	17	0
12月	19	403	769	26	1	26	0
1月	17	368	714	24	1	21	0
2月	20	426	836	24	0	24	0
3月	21	455	872	30	0	30	0
合計	231	4928	9356	249	11	287	7

表２　視能訓練疾患別内訳

弱視訓練	47名
遠視性不同視弱視	22
斜視弱視	11
屈折性弱視	6
近視性不同視弱視	4
乱視性不同視弱視	2
形態覚遮断弱視	2

4）言語聴覚療法

平成27年度の言語聴覚療法は常勤３名、非常勤５名（週５日：１名、週４日：１名、週２日：２名、月１日：１名）の言語聴覚士が担当した。評価、訓練の総数は2043人（初診362人、再来1681人）であり、増加傾向にある。表１に障害別患者内訳を示し、重複症例についても示した。

各疾患の総件数に占める割合については、学習障害、吃音の患者が増加傾向にあり、当該疾患に対する支援の社会的ニーズが高まっていると考えられる。また、口唇口蓋裂の初診患者が倍増しているが、これは当該疾患の初診時期を早めたことが原因として挙げられる。口唇口蓋裂児にはさらに早期に介入することが求められており、今後、初診数、訓練数ともに増加する見通しである。

今年度STが主体となって行った専門外来は、発音外来、ことば・コミュニケーション外来、難聴ベビー外来、補聴器外来、ことり外来（気管切開言語外来）であり、各件数を表２に示した。

補聴器外来（632件）、聴力検査(2896件）の件数は前年度と比べて増減はなかった。詳細は耳鼻咽喉科の項で報告する。

（遠藤　俊介）

表１　疾患別患者内訳

	新患	再来	合計
MRによる言語発達遅滞	31	121	152
自閉症スペクトラム障害	125	48	173
脳性麻痺	0	0	0
学習障害	9	68	77
特異的言語発達遅滞	4	27	31
失語症	0	12	12
高次脳機能障害	4	56	60
口唇・口蓋裂	75	522	597
その他の器質的構音障害	2	28	30
鼻咽腔閉鎖機能不全	11	70	81
機能性構音障害	19	158	177
舌小帯短縮症	9	12	21
運動障害性構音障害	1	13	14
音声障害	2	0	2
摂食・嚥下障害	13	37	50
気管切開後の発声障害	6	95	101
音韻障害	0	0	0
吃音	12	95	107
難聴	26	215	241
小耳症・外耳道閉鎖	0	0	0
その他	13	104	117
(内重複例)	97	338	435
計	362	1681	2043

表２　外来別件数

発音外来	392
ことば・コミュニケーション外来	29
ことり外来(気管切開言語外来)	50
難聴ベビー外来	211
補聴器外来	632

5）心理

本年度は常勤心理士が４名、非常勤心理士５日/１週間で心理部門を担当した。本年度の他科からの新患依頼件数は596件、再来の継続相談件数は1874件、また心理検査件数は690件であった。他科からの新患依頼内訳（表３）では、昨年度から引き続き、発達外来からの依頼が最も多く、次いで精神科、未熟児新生児科と、この３科からの依頼が多かった。他は神経科、遺伝科、脳神経外科からの依頼が多かった。昨年度に常勤が１名増員されて、心理検査件数、再来継続相談件数ともに増加しており、今年度もほぼ同数であった。またコンサルテーション件数は、昨年度66件だったのに対し、今年度は203件と激増しており、これは小児がん病棟や未熟児新生児病棟への介入を開始したためと考えられる。

（成田　有里）

表１　平成27年度患者数

新患件数	596
再来継続相談延べ件数	1,874
合計	2,470
心理検査件数	690
コンサルテーション件数	203

表２　年齢別依頼内訳（平成27年度）

	男児	女児	合計
０～５（歳）	210	116	326
６～12	152	77	229
13～	19	22	41
合計	381	215	596

表３　他科からの新患依頼内訳（平成27年度）

依頼元科	人数
未熟児・新生児科	103
感染免疫科	3
血液・腫瘍科	6
神経科	57
遺伝科	19
精神科	156
総合診療科	1
脳神経外科	18
スクリーニング外来	1
アセスメント外来	4
発達外来	228
合計	596